科目区分，小学校教科科目「初等音楽」
担当教員：田邉　隆

初等音楽の課題

音楽教育講座・田邉　隆

１．授業科目の概要

この科目は最大 117 名の受講生が想定された。常勤教員 7 名で担当し、1 クラス約 16 名の割合であるが、実際の受講生数は、専修や学年により偏りがあった。

この科目は教育実習や教職に就いた時を想定し、伴奏や弾き歌いができるように、理論・実技を通して音楽体験を行っている。以下、今学期に担当した 15 名の授業について報告する。

２．受講者

初回に鍵盤楽器経験の有無と読譜に対する慣れについて調査した。

［(fig.1) 鍵盤楽器経験の有無と読譜］

15 人		鍵盤楽器経験の程度			
		A	B	C	無
読譜の慣れ	A	2 人	1 人	―	―
	B	―	2 人	―	―
	C	―	3 人	2 人	―
	無	―	―	―	5 人

（楽器経験と読譜の慣れについて多い順にＡＢＣ・無とした。）

鍵盤楽器経験と読譜の慣れについては、相関が見られ、経験者には表現力をさらにつけ、経験が浅い者には、基本的事項から援助が必要である。このため、一斉授業と個別授業を併用して行った。また個人カルテを作成し個人の進捗状況を記録した。

３．評価

評価観点は「平常(20 点)・理論テスト(20 点)・実技テスト(40 点)・努力点(20 点)」の 100 点満点で行った。

「平常点」は、15 回の授業に臨む準備状況を評価した。「理論テスト」は、音程・コードネームを中心に行った。「実技テスト」は、伴奏(20 点)・弾き歌い（20 点）で最終テスト時を評価した。「努力点」は、半期で 7 曲以上の合格を最低ラインとし、それ以上の合格曲を準備出来た場合、曲数に応じて加点した。最終的な合格曲の分布は（fig.1）の区分［AA ～ CC・無］で（fig.2）を示した。

［(fig.2) 初回調査結果と最終合格曲数］

合格曲数	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17（曲）
AA	―	―	―	―	―	―	1人	―	1人	―	―
AB	―	―	―	―	1人	―	―	―	―	―	―
BB	―	1人	―	―	―	―	―	―	―	―	1人
CB	1人	2人	―	―	―	―	―	―	―	―	―
CC	―	1人	―	―	―	1人	―	―	―	―	―
無無	1人	―	2人	―	―	―	―	―	―	―	2人

α群

４．音楽経験と進度

鍵盤楽器の経験と合格曲数との相関(r=0.16)は無いが、特に「α群」に対する援助のありかたについて考える。

①BBの場合

数曲に関わりながら試行錯誤し、1 曲合格するに数週間を費やすなど、合格ラインに達することなく 1 ～ 2 週間が過ぎている。

②CBの場合

欠席がちで成果がなかなか見えない場合、と難曲に挑戦し多くの時間を要する場合の 2 通りがある。

③CCの場合

演奏の要領を把握するに時間を要する場合であるが、これは半期 15 週という限られた期間ではなく、少なくとも 1 年間継続すれば、かなりの成果が期待できる。8 曲合格までに要する経緯に示す様に次第に演奏に慣れていることが判る。

［(fig.3) 合格に要する時間の推移］

合格曲	*1*	*2*	*3*	*4*	*5*	*6*	*7*	*8*（曲）
要した週	4	4	3	1	1	1	1	1（週）

④無無の場合

② CB と同様に、欠席がちの場合と難曲に挑戦する場合があり、１曲にかかる時間が多い。前者は、読譜への慣れが障害となり、なかなか前に進めない状態が見られたが、タブラチュアによる伴奏（ギターなど）に転向することにより、徐々に進むようになった。

５．理論と実技の関係

音楽理論の説明は、音名・音程・コードネーム(Major ／ minor ／ dim.／ aug.／ sus4 ／ 7th ／ 9th)・移調について行った。８週目の段階で、ペーパーテスト(１回目)を行った。その後、伴奏・弾き歌いなどの実技を中心に授業を進め、14 週目で再度ペーパーテスト（２回目）を行った。理解度を見るために、同一の問題であることが判らないように答案の回収を行って２回目のテストに臨み、理論と実技の関係を推測しようと試みた。しかし、実技点と理論点の相関係数は（r=0.45）と相関を見いだせなかった。

[(fig.4) ペーパーテストの理解度の変化(100点満点)]

楽器・読譜		１回目	２回目	
A・A		67.5	98.5	
A・B		30.0	65.0	＜イ＞
B・B		72.5	85.0	
C・B		40.0	66.7	＜ロ＞
C・C		74.0	87.5	
無無	欠席多	25.0	35.0	＜ハ＞
	欠席少	86.7	91.7	
平　均		56.5	88.1	

（fig.4）の〈イ〉〈ロ〉〈ハ〉が課題である。

〈イ〉は、2 回目の数値が低い。しかし 11 曲合格と実技面では良く努力している。２回目ではケアレスミスがあり得点が低くなっているが、このミスが無いと+10 点となる。基本的な問題は理解している。

〈ロ〉と〈ハ〉は欠席が多く、理論の理解不足とともに理論と実技の関わりに時間を費やすことなく推移した事が問題点としてあげられる。

参考までに「出席参加率」と「総合点・実技点・ペーパー点」の相関をあげた。

授業参加率：総　合　点（r=0.85）
授業参加率：実　技　点（r=0.78）
授業参加率：ペーパー点（r=0.51）

６．実技の評価

今回、ティーチングアシスタント(TA)を活用して授業を行った。下記の観点でそれぞれが 5 段階で評価し、教員と TA の評価の相関を求めた結果、(r=0.95)と極めて高い相関を見た。その際の評価表が（fig.5）である。

[(fig.5) 評価観点と基準]

観点（規準）	基　準
1)流暢な演奏ができる。	５・４・３・２・１
2)基本的な奏法が出来ている。(伴奏の音域・強弱や左右のバランス等)	５・４・３・２・１
3)音楽的な演奏で（児童・生徒への）支援ができる。	５・４・３・２・１
4)しっかりと歌えている。(弾き歌い)	５・４・３・２・１
5)歌と楽器演奏が調和している。（弾き歌い・伴奏）	５・４・３・２・１

７．今後の課題

①テキストの改善

理論面の理解を深めるために、実技との関連を一層強調した内容を行う必要がある。特に、基本的な音型とその応用の事例を多く用いたテキスト作成を行う必要がある。

②１対１対応学習と協働学習の導入

特に実技面で個人差が多く、教員と受講生間で 1 対 1 対応のレッスン形態が必要である。１枠(90 分)で 15 人のレッスンは、TA 無しでは厳しい現状であり、受講生のコメントにも「TA の指導・助言・解説」への謝意が多く記載されていた。

今後は、受講生同士の連弾（伴奏と旋律）という学習形態(協働学習)を取り入れる事で、より効果的な練習が進むとともに、演奏する喜び、アンサンブルの面白さを軸として授業を計画する必要がある。

③テキストに掲載されている教材の音源化

この授業は後期開講であるために、年末年始で実技練習が途絶える。また土日祭日には、練習室を利用できないセキュリティの課題もある。現状の中では、独習支援の為の情報提供が不可欠と思われる。たとえば、テキストに使用されている曲の音源を事前に配布することにより、独習の補助となる教材作成が必要である。